

南三陸プロジェクト！

2011年の震災後、慶應大学で、宮城県南三陸町で支援活動を行う「慶應義塾南三陸支援プロジェクト！」が立ち上がった。プロジェクトはその目的をボランティアから“南三陸とつながる”ことに変え、これからも継続的に活動を続けていく。学生代表の栗津文香さんに話を伺った。

“支援”で終わらない

宮城県南三陸町。太平洋に面し志津川湾を取り囲むその町の津波被害は甚大だった。その町の戸倉地区に慶應は森を所有している。このことをきっかけに、学生が主体となってこのプロジェクトは運営されている。これまで、震災直後の夏休みと震災から約1年経った春休みにボランティアツアーを企画してきた。夏には応募が殺到し、200人以上もの学生や教員が南三陸町に足を運んだ。

夏の活動でやることははっきりしていた。「がれき撤去など目に見えることができた時」と学生代表の経済学部3年、栗津文香さんは振り返る。一方春になると、がれきは片付き、仮設住宅への入居も済み、状況は落ち着いていた。だからこそ、現地の人のために何ができるのか途方にくれた。「何がしているかわからない」というのが正直な感想だったという。

ただ、現地の人たちと相談しながら自分たちのできることを探していく中、そんな姿勢を現地の人は暖かく迎えてくれた。ある時は、ツアーの宿泊先としてお世話になっている民宿“ながしず荘”から、「いつくるの?」「ご飯食べにおいでよ」と電話がきたことも。「こんなに暖かく接してくれる人たちがいる。こういう人たちとせっかく縁ができたのだから、その縁を絶やしたくない。」そう感じた栗津さんは話す。

ボランティアというフェーズが終わるだろうという話は、夏休み後すぐメンバーの間で挙がったという。たとえ支援の必要性はなくなっても、せっかく縁のあるこの土地に、ずっと関わっていきたいという気持ちは依然として残っていた。栗津さんにとって南三陸は「ゆったりしていて、南の島にバカンスに行くような感じ」だという。そんな南三陸町の良さを知ってほしい。遊びに行くくらいの気持ちで、とにかく足を運んでほしい。プロジェクトの主旨をボランティアから南三陸と関わることに変え、その表れにプロジェクト名から「支援」という単語をとった。

プロジェクトの学生スタッフは現在7,8人。2週に1度ミーティングを開く。月に一度南三陸に関わる専門家をお呼びして講演会を開催するほか、今年の夏休みには再びツアーを計画している。これまでと同じく数期にわけて実施されるが、それぞれの期に「漁港」や「慶應の森」といったテーマを設け、テーマに関連した体験を通して南三陸を知ってもらおう予定だ。詳細はホームページやツイッターで随時発表される。

的確に慎重に質門に答えるなか栗津さんは、このプロジェクトを「これから先何十年も続くものにしていきたい」とはっきり語った。慶應生でなくても、外国人の方でも、「ぜひ一度足を運んでみてほしい」と笑顔で話す栗津さんとともに、南三陸町をその身で感じてみてはいかがだろうか。